【主題】　災害を自分ごととしてとらえ、自ら判断して行動する子ども

【副題】　地域とつながり、楽しく学ぶ防災教育

【学校・団体名】長野県下伊那郡阿南町立富草小学校
【役職名・氏名】　校長　宮澤　昭二

本校は長野県の南端に位置する阿南町にあり、周囲は豊かな自然に囲まれ、恵まれた風土や心温かな人々に支えられて、児童は明るくはつらつと学校生活に励んでいる。こうした豊かな自然や文化が財産となる一方で、山間地特有の心配もある。学区の至る所に起伏の激しい急傾斜地や地すべり地帯があり、ハザードマップには数多くの「土砂災害特別警戒区域」や「警戒区域」が示されている。自宅や通学路で、その危険を心配しなくてはならない児童も多い。加えて南海トラフ地震対策推進地域にも指定されており、風水害だけではなく、地震による被害も懸念される。

本校は、学校教育目標「みんながかがやく富草小」の実現に向け「自ら考え 自ら動く」子どもの育成をめざしている。そうした中で地域の切実な課題である防災に対しても、児童が防災を自分ごととして自分から取り組むことを願って上記のような主題を設定した。

Ⅰ　研究のねらい

大雨や台風、地震といった「災害」に加え、「防災」という言葉に対しても、多くの児童が「怖い・心配・危険・大変なこと」というイメージを持っていることがわかった。しかし、ただ恐れているだけでは、児童に「自分で自分の命を守る力」は育たない。また、防災に関する学びは、閉じられた学校の中では決して完結しないという思いも、職員が共通して持っていた。

そこで、本研究のねらいとして

◇地域とつながり地域とともに推進する防災教育

◇児童が楽しみながら学ぶことで、防災に自分から前向きに取り組もうとする防災教育

という２点を実践研究の基盤として据え、具体的かつ体験的な防災についての学びを積み重ねることで、児童の生きる力につながる防災教育の実現をめざす。

児童が、災害は「怖い・大変」、防災は「大人がやること」といった意識でいるうちは、自分ごととして防災を考える育ちにつながらない。防災学習は、現実には災害が起こっていない時や場所で、災害を想定して学ぶ。その時、児童がそこに学ぶ意義や楽しさ、自分でもできるという喜びを感じなければ、継続した防災学習にはなっていかない。「防災について考えることは大事であり楽しい」という思いをもって児童が防災学習に向かうことで、「自ら考え自ら動く」児童が育ち、それが学校教育目標の実現に近づくと考える。

Ⅱ　経過と内容

①過去の経験を無駄にしない

本校は、過去に大雨による川の増水が原因となる児童の事故という大変悲しい出来事を経験している。職員は新しく本校に赴任すると、まずこの事実を重く受け止め、二度と繰り返さないという誓いをたてる。ＰＴＡや地域でも守り続けている意識である。

具体的な取り組みとして、ＰＴＡや職員が、月初めの安全の日の取り組みに加えて、“安全パトロールの日”を別に設定している。また下校は全校児童が昇降口に集まり、当番職員の話を聞いた後に集団で下校をする。その際、安全に関する話を頻繁にしている。

また、ＰＴＡ社会部の事業として、毎年学区内危険箇所の確認と安全マップの見直し作成が行われ、地区内に手作りの「キケン」という立て看板を設置している。こうした安全や防災への高い意識を受け継いでいくことは、本校職員、そしてＰＴＡや地域にとっても必須の課題となっている。

②地域とつながった富草防災教育のきっかけ

～「かまどベンチ」づくり～

ＰＴＡと連携して安全･防災教育を推進していると、それが地域の消防団ともつながるという新たな展開に発展した。消防団に所属しているＰＴＡのＫさんの「消防団は火事の時だけではなく、地域の防災力向上も大事な役割である」という話を受け、Ｋさんに４年生の社会科・総合的な学習の時間の講師をお願いした。学習が展開する中、Ｋさんから児童に「学校に災害時に役立つものが作れないか」という課題が投げかけられた。この問いかけに児童は、災害時に土砂崩れで道路が寸断されたり橋が壊れたりして周囲から孤立する事態や、電気・ガスが使えなくなる事態を想定して、その時にお湯をわかしたり、食事を作ったり、暖まったりできるものがあるといいと考えた。これに対してＫ

さんから、平常時はベンチとして活用し、災害時にはかまどになる「かまどベンチ」の存在を教えてもらい、それを自分たちで作ろうという実践が生まれた。消防団の指導や協力を得ながら、児童は自分たちの力でかまどベンチを完成させた。このかまどベンチの完成が、楽しく学びながら防災を考えるきっかけにもなった。

③児童の生活につながる防災学習へ

～消防団と共同で『防災ミニキャンプ』の実施～

かまどベンチの完成をきっかけに、それまで全校児童が縦割り班ごとに飯盒炊さんなどをしていた『縦割りミニキャンプ』という行事を『防災ミニキャンプ』というスタイルに変更して防災教育が始まった。『防災ミニキャンプ』では、以下のような実践が行われた。

◇地震を想定した避難訓練

◇消防団の操法訓練の実演見学

◇消防団による防災ブース（煙体験、消火器の扱い方、消防車両の説明、防護服体験）を児童が体験

◇かまどベンチを活用したカレー作り

こうした取り組みにより児童の防災意識が高まり、翌年の４年生は「地域の防災マップを作りたい」という願いをもった。実際に消防団の方々と地域を歩いて自分たちの目で現地を確かめ防災マップを作成した。活動を地域に広げる中、児童は自分たちでは気づかなかった防災の視点があることも学び、それらをマップとともに全校に発表した。これを聴いた児童も、自分の住んでいる地区のどこにどんな危険があるのか関心を高め、家族、祖父母の家や近所の人のことを含めた自分の生活全般に関連した防災を考えていた。まさに自分ごととして防災を考える芽が育ち始めた。

④地域の方と共に学ぶ『富草防災フェス』の誕生

消防団の方々との連携が成果となってきた『防災ミニキャンプ』を、さらに地域に住む人たちにも広げることで、児童の自分ごと感が高められるのではないかという考えが出された。そして令和元年度には、それまで学校だけでおこなっていた『防災ミニキャンプ』を『富草防災フェス』と改称し、地域の皆さんも参加できる防災体験学習に発展させ、以下のような実践を行った。

◇学校の避難訓練を、隣接する富草保育園との合同実施とし、園児も小学校校庭に避難し、消防団の操法訓練や消防自動車の見学も合同参加とした。

◇地区防災無線で地域の方々にも避難を呼びかけた。

◇避難場所となる小学校校庭には、町役場に協力を依頼して非常食紹介コーナーを設置した。

◇ミニキャンプ時代から続くカレー作りは「富草防災カレー」とし、災害時でも無理なく準備できる食材を児童が考えた。児童は自分の家の畑でとれるものや、ソーセージやツナ缶といった非常食用にストックしておけるものを材料にしてカレー作りをした。作ったカレーは、避難してきた地域の方と一緒に食べた。

◇防災ブース体験は地域の方の参加や参観可能とした。

参加者も増え成果も数々あった『富草防災フェス』だが、特に「富草防災カレーづくり」で発揮された児童の姿は印象的であった。それは、児童が学んだ知識を実際の場面に活かすにはどうしたらいいか、児童自身の生活に引き寄せて考える場を設けたこと、さらに考えるだけではなく児童が自分たちでその考えたことを本当にやってみる体験の場を設けたことから生まれた。その時の児童の姿はとても楽しそうで、いきいきとしていた。「今後も防災学習は、児童の実際の生活と結びつけて、自分ごととしての体験を通して楽しく学ぶことを大事にしよう」と職員間で確認しあった。

⑤持続可能な「富草防災フェス」をめざして

身近な地域とつながることで、防災を自分ごととして学ぶ芽が育ちはじめ、富草小の特色ある活動として位置づいた防災学習であるが、そんな矢先に襲ってきたのがコロナ禍である。高齢の方が多いこの地域では、活動に制限をかけなければならない事態となった。軌道に乗り始めた防災についての学びを、ここで止めることなくコロナ禍でも持続可能な形にしていくためにはどうしたらいいか、その方法をさぐる話し合いが行われた。そこでは“防災の学びは繰り返し実施することがとても大事だが、ただ同じことをやっているだけでは、児童の学びの意欲の高まりにはつながらないのではないか”という意見に対して、“持続可能という視点で言えば、学校職員が毎年毎年新しい企画を考え出していくことは困難さを伴い、課題が大きくなって続けることが難しくなる”という思いも出された。

この課題解決の手助けとなったのが、地域とつながり、地域と共にすすめる防災教育という取り組みをしていたことであった。学校職員だけでは行き詰まってしまいがちな課題も、多くの人と連携することで前に進むことができた。「防災はみんなの課題」という意識を地域に広げることが、学校としても取り組みやすくなるという実感を得ることになった。

そのひとつが地元消防団に加えて、阿南消防署の皆

様にも協力をしていただけたことである。もう一つは、富草防災フェスのねらいに“楽しく学ぶ”というキーワードを加えたことである。この“楽しく学ぶ”という発想は、学校職員の中だけで防災教育を考えていたら生まれなかったかもしれない。職員と消防団の方や消防団ＯＢの方も交えて話し合いを進める中で、大人のやる気や楽しさ感も高まり、その活気あるよい雰囲気から“楽しく学ぶ”ことのよさが確認された。

児童にとっての「楽しさ」とは、興味関心がくすぐられる楽しさ、新たな発見や学びを実感できた時の楽しさ、前より向上した自分に出会える楽しさ、自分でできるようになる楽しさなどいろいろ考えられる。富草小の防災教育を続けていくためには、児童に「防災について知ること・体験すること・考えることは楽しい」という思いをぜひ持ってほしいという願いが、関係する地域の方と学校職員で共有された。

コロナ禍でも持続可能な富草らしい「防災フェス」として実際に行ったことは以下のとおりである。

【コロナ禍の「富草防災フェス」　一日の様子】

～午前の部～ 以下(1)～(5)のタイムテーブルで進行

(1) 地震を想定した避難訓練(R2,3,4)

(2) 消火訓練の見学・体験

→消防団の消火訓練の実演見学・体験(R2,3,4)

・団員の消火訓練の後、６年生全員が放水体験

・保育園児の消防車見学(R2,3)

(3) 防災学習①→学校が計画・進行

≪令和２年度≫

・非常食の試食（ビスケット等を持ち帰って試食）

・地震体験車を依頼して全児童が体験

≪令和３．４年度≫

・かまどベンチで高学年児童が薪から火を熾す

・自分たちが熾した火で焼き芋づくり

・土のうを作り/運んで/積み上げるリレー競争

・４年生児童の学習発表（これについては後述）

(4) 防災学習②→富草消防団が計画・進行

≪令和２年度≫

・「煙体験」「応急手当と救急搬送体験」「雨水の濾過実験」という３ブースを、児童は縦割り班で巡回して体験学習。

≪令和３年度≫

・「災害時の応急手当と搬送体験」というテーマで圧迫止血や骨折の固定法を実技で体験。さらに怪我人を園芸用支柱と毛布で簡易担架をつくって搬送する方法を自分たちで考えて実施。

≪令和４年度≫

・「家にあるもので電池を作ろう」というテーマで活性炭・塩水・シャープペンシルの芯・アルミホイルで電池を作る活動を縦割り班で実施。

(5) 防災学習③→阿南消防署が計画・進行

≪令和３年度≫

・1.2 年生対象：防災ブース

「防災かるたで地震等への心がけをまなぼう」

・3.4 年生対象：救急ブース「災害時の応急手当と搬送の実習」

・5.6 年生対象：自然災害ブース

「災害への備えや対応をクイズで楽しく考える」

≪令和４年度≫

・1.2 年生対象：救急ブース

「救急クイズ！」「心臓マッサージの体験」

・3.4 年生対象：防災ブース

「ハザードマップで地域の危険な場所や避難所を確認しよう」＊非常持ち出し品の具体も確認

・5.6 年生対象：救急ブース

「災害時の応急手当と搬送の実習」

これらの防災学習で常に大事にしたことは“自分で考え自分でやってみる”“防災は自分ごと”“自分がやることでみんなの安全も作れる”という意識であり、防災の必然や積極的かかわりの大切さを自分の生活に活かすことである。実際、児童はフェスでの体験を家庭で家族に伝えていることが会話や日記から伺えた。

～午後の部～

(6) 防災縁日→おやじの会が計画・進行

“楽しく防災を学ぶことで、児童が防災に対して前向きに取り組もうとしたり、一人一人、生きて働く力として身につけたりしてほしい”と地域の「おやじの会」（→「お」れたち・「や」っぱり・「じ」もと好きから命名、消防団ＯＢや地域の有志で構成され児童の保護者の顔もみられる。防災士の資格をとったメンバーも多い）の方々が、午後の体験活動の場として『おやじの会プレゼンツ！防災縁日』と題した場を設けてくれた。これは児童に大好評であった。体育館全体に、まさにお祭り縁日のように防災に親しみ学ぶブースが３つ用意され、児童は縦割り班で各ブースをまわり、防災士とふれあいながら楽しく学ぶことができた。

ブース１：「射的コーナー」

→非常持ち出し品の絵カードを的にして、自分がねらうカードの持ち出し品の名前とその理由を言ってからおもちゃの鉄砲でその的を打つ。

ブース２：「言葉づくりゲーム」

→ばらばらに置かれた文字カードから、非常持ち出し品の言葉をつくるゲーム

ブース３：「折り紙・缶バッジコーナー」

→紙で手作りした箱を非常時のお皿にする工夫。

【防災フェス体験後の児童のふり返りカードより】

→ぼくが防災フェスを通して学んだことやこれからに生かしたいことは三つあります。一つ目は消火体験です。６年生が一人一人ホースをもって消火体験をしました。ちょっととびそうになったけど消火できました。二つ目は焼きいもです。みんなで協力して火をおこすことができました。三つ目は防災縁日です。ぼくは、バラバラ持ち出し品の担当をしました。みんなが楽しそうにやってくれてうれしかったです。これからに生かしたいことは、火のおこし方などを忘れないようにしたいです。また防災フェスをやりたいです。

『富草防災フェス』での体験によって、自分自身の成長に喜びや楽しみを感じながら、防災に自分から前向きに取り組もうとする児童の姿を期待し、今後も継続した取り組みをしていきたい。

⑥日常の学びで取り組む防災教育

４年生の社会科学習「自然災害からくらしを守る」では、この単元の学びが教科書だけの学びとならないよう、児童の問題意識をもとに地域に目を向けた学習展開を取り入れ、児童が自ら学ぶ学習としている。前述した地域の防災マップ作りもその一例である。また天龍村立天龍小学校４年生とのICT機器を活用した遠隔合同学習も取り入れ「最近雨の量が多くなっているけど、わたしたちの命やくらしをより安全にするためにはどうすればいいのだろうか」という両校共通の学習問題を立て、自助・共助・公助について学習を進めた。遠隔合同授業を通して両校の学びを交換し、その情報の比較検討によって自分たちの考えを再構築し、両校で伝え合った。これにより防災についての自らの考えを深めた児童は、避難レベルへの関心を高め「地域の高齢者の方に避難レベルのことを事前に伝えて、みんなで避難できるようにしたい」という新たな願いを持った。そこでこの願いを総合的な学習の時間の課題に移して、主体的に学びを深めていった。そして児童は『防災フェス』で、避難レベルに応じた対応についての劇を発表したり、市販のスナック菓子にお湯を加えて温かなスープになることを発表したりした。さらに自分たちの劇や学びをビデオに撮り、町のケーブルテレビで放送してもらうことで、町民の方にも自分たちの思いを伝える活動へと発展させた。

翌年の４年生は「自分たちにできる防災にはどんなことがあるだろう」という課題意識で、自分のオリジナル防災バッグ（非常持ち出し品）を考え出し、なぜこれが必要なのかその根拠も含めて発表した。

こうした姿は、自分ごととして自分から行動する防災教育をめざしてきたことの成果の一端と考える。

Ⅳ　まとめ

「自分ごととして自分から」「地域とつながる」「楽しく学ぶ」といった視点で富草の児童にとっての防災教育をじっくりと見つめ直したことで、今まで気づかなかった支援が、地域にはたくさんあることを学んだ。

ここまで「富草防災フェス」を中心に述べてきたが、この他にも飯田建設事務所の防災に関する学校支援を依頼して砂防ダムの学習も行った。土砂災害や砂防ダムの学びに加え、砂防ダムの仕組みを「ダムカレー」として学んで食べる企画も体験した。また当地方における過去の大災害「三六災害」から６０年という節目で開催された「土砂災害防災学習会」というイベントに、隣の大下条小学校と合同参加もした。新たに「防災クラブ」も発足した。年８回のクラブ活動の時間に、おやじの会の指導のもと、防災についてもっと学びたいと希望する児童が所属して楽しく活動している。

さらに町の危機管理対策課の方を講師として、防災について職員や地域の方が学ぶ研修会も行った。

防災教育を本校の特色ある教育活動とし、地域とつながって取り組み続けることで、今私たちが実感していることは、防災の学びを机上の学習で留めないことの大切さや、継続して取り組むことの大切である。体験を自分なりにふり返って考える場を設け、それをみんなで共有しながら、児童の生きる力にしていきたい。

今後も体験活動のねらいや目的を明確にして児童の願いや実態を把握し、児童がやってみたいと願い、児童が自分で考えて行動することは楽しいと思う防災教育を続けていきたい。